



パノラマえほん うちゅうといのち

縣 秀彦・真鍋 真 監修

読み物
お薦め度
4
☆☆☆☆★

旬報社 定価2,415円 オールカラーパノラマブック+ガイドブック35頁

一般向けの講演などでよく聞かれるのが、「今見えている星も実はもうないかもしれないですよ。」という質問だ。今見えている星は実は過去の姿で、今この瞬間にその星のことを知る手だてがないということは、多くの人に恐怖感や宇宙の広さによる孤独感を与えるものらしい。研究で星のことを考えているときはそのようなことは忘れているが、このような質問を受けたときにはいつも「アンドロメダ銀河の光は人類が誕生したころに産まれた」ことに恐れをなしていた子ども時代を思い出す。この本は、切っても切り離せない宇宙の空間と時間の旅を美しい絵巻物として見せてくれる不思議な本である。

普通の書籍とは違い、ページを順番に読んでいく構造にはなっていない。蛇腹折りになった別冊の表面にはわれわれの住む世界から宇宙の果てまでの「大きさの旅」、裏面にはわれわれの住む時代から宇宙の始まりまでの「時間の旅」が描かれている。その長さなんと2.8m。ここでの裏表は、天文学者からみた裏表で、古生物学者からすると逆なのだろう。大きさの旅では、いろいろなスケールで見える地球や宇宙の姿が、4D2Uドームシアター Mitakaの美しい画像で描かれている。一方、時間の旅では、それぞれの時間帯に存在していた古生物たち、さらに古くは地球や宇宙の姿が描かれる。古代世界に住む生命たちのイラストは著名なイラストレーターの手によるものだから、ありとあらゆる形態の生き物がものすごい勢いで生きて命をつないできたのだなあと思わせる迫力がある。始まりはどちらもわれわれの住む現在の世界。そしてどちらの旅も、宇宙の始まった瞬間の一瞬につながっている。本そのものはこの別冊の解説書になっていて、古生物の名前やそれぞれのスケールでの宇宙の様子などが解説されて

いる。

表と裏はそれぞれの物語として楽しんでもよいし、逆順に読むことで時間を逆行する旅や宇宙の果てから地球までの物語を楽しむのもよい。そしてこの本ならではの楽しみ方が、表面と裏面を行ったり来たりする読み方だ。1ページ1ページの表裏を見比べると、表面の天体のわれわれからの距離と、その距離に応じた過去の世界が対比できるようにになっているのだ。われわれの銀河の果ては、マンモスのいる氷河期に対応している。恐竜が跋扈していた世界に対応する遠くには、銀河群がある。宇宙の大規模構造の距離に対応する過去のページには、カンブリア爆発期の特異な動物たち代表のアノマロカリスが泳いでいる！私は思わず、大規模構造のボイドをくぐり抜けながら悠々と泳ぐアノマロカリスの姿を思い浮かべてしまった。天文学を学ぶものなら一度は思い浮かべているであろう想像が、こんな風に現実に描かれた絵本はとても珍しいし、読む人の心に深く印象づけられるのではないだろうか。この本のたいへん珍しい構造は、お経から発想を得たものなのだそう。奥が深い。

ところで、タイトル中の「えほん」は、どの読者層を対象としてつけられたものだろうか？個人的には、その平仮名の響きは幼児、もしくは幼児子育て中のお父さんお母さんに向けられているように思う。しかし小さな子どもには、星雲のような派手な写真の少ないこの本はやや難易度が高すぎると思われる。一方、この本の狙っている「宇宙が恐竜が好きでもっと知りたい（小学生程度の？）子ども」にとっては、「えほん」はカッコいい、新しい知識を得られる本には見えないかもしれない。その分を考慮して星を一つ下げた。

馬場 彩 (青山学院大学)